■編集・発行　NPO法人 大谷石研究会
〒321-0345　栃木県宇都宮市大谷町350番地
（有限会社　高橋佑知商店内）
TEL028-652-0005　FAX028-652-2337
http://www.ooyaishi.org/
mail:info@ooyaishi.org
編集責任者　佐藤 公紀

大谷石研究会では、会員の募集をしています!

入会の資格は、年齢、性別、職業、地域を問いません。
「大谷石が好きだ!」という事だけです。
現在、20代から80代の約120名の会員がいます。
年会費は個人会員4,000円、特別会員10,000円です。
入会希望者は、左記の事務局へ問い合わせて下さい。

旧小日野屋商店調査報告

NPO法人大谷石研究会 理事　小林 基澄（小山工業高等専門学校建築学科 助教）

令和6年10月6日、大谷石研究会メンバーと高専、大学の関係者ら24名で、宇都宮市徳次郎町内に建つ旧小日野屋（こひのや）商店の石造建物の実測やヒヤリング調査を行いました。

旧小日野屋商店は日光街道に面し、商家として明治初期に開業しました。開業後は教科書の販売や、日用品など雑多な商品を扱っていた時期もあり、地域の中心的な存在だったといわれています。敷地内には見世蔵や離れ、石蔵、納屋など、合計6つの建物が存在し、それらすべてに大谷石や近くで産出した徳次郎石が使われています。

これらの建物および敷地全体について、図面の作成を意識した内外の実測や写真による記録、及び所有者へのヒヤリングを行いました。建物の図面をおこすことで、石造建物の建築的な詳細を明らかにすることを目的としています。

ここで、調査した小日野屋商店の建物の紹介をしていきます。まず、街道正面に建っている見世蔵についてです。この建物は明治7年に建てられ、建物の外周に徳次郎石が張られています。側面だけでなく正面にも石が張られた町屋建物というのは大変珍しく、さらには下屋部分には石を雄瓦と雌瓦に加工して交互に重ねた石瓦も葺かれています。商店と住居をかねた2階建ての内部もさることながら、街道沿いに印象深い石の景観を形成していました。

一方、敷地奥に佇む石蔵3棟も、非常に大きな存在感を放っています。それぞれ明治3年、明治15年、明治45年に建てられており、その間を石塀が繋いでいます。こちらも全面石が用いられ、屋根部分も石瓦です。開口部は比較的シンプルですが、破れ目地でレイアウトされた外壁はビシャンや平刃で調整され、石工によるさりげない丁寧な加工や仕事が光ります。敷地内の庭園空間のなかに見事に配置されています。他にも納屋や倉庫、井戸、祠などの建物が建っています。このように、石塀に囲まれた敷地内には別世界のような魅力的な石の空間が広がっていました。

今回の調査は朝から始まり1日かけて完了しました。得られたデータをこれから分析して、図面化も行います。今年は恒例の農村集落の石造建物と町並みの調査ではなく、建物の詳細を実測するものであり、研究会メンバーのみならず、たくさんの学校の学生や地元の関係者が協力してデータ収集が行われました。このことにより、これまでとはまた違う新たな地域の石造技術・文化について、深く掘り下げることにつながると考えられます。

石蔵の内部を実測調査中

街道沿いから見た見世蔵

敷地奥の石蔵

会員紹介　「大谷石文化を学び続けて」

NPO法人大谷石研究会 会員　張海燕
（作新学院大学経営学部　准教授）

作新学院大学経営学部の張海燕と申します。2006 年に留学で来日して今は 20 年が経とうとしています。私は、大学院から中国と日本における文化遺産の保存と観光活用に関する研究を続けてきました。2022 年に作新学院大学に赴任するために宇都宮市に移住してきました。初めて訪れた大谷資料館の広大な地下空間に圧倒されたことは、今でも鮮明に覚えており、その日から大谷石の魅力に惹かれ続けています。

この度、大谷石研究会に入会し、理事長様や会員の皆様から大谷石の歴史や価値、さらには観光振興の取り組みについて学ぶ機会をいただきました。お話を通じて、大谷石が持つ文化的意義と地域資源としての重要性を改めて認識し、ますますその魅力に引き込まれています。大谷石の採掘跡地は、単なる建材ではなく、地域の歴史や文化、そして住民のアイデンティティに深く根ざした存在だと強く感じました。

大谷石についてまだまだ学ぶべきことは多いですが、これまでの研究経験を生かしながら、会員の皆様からご指導をいただき、大谷石の保存や活用、観光振興におけるマネジメントについてじっくりと考え、微力ながら地域の持続可能な発展に貢献できるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。